中国四国教育学会 教育学研究紀要（CD-ROM版） 第60巻（2014年）

国語科教員養成課程で出会う『源氏物語』(2)

―「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を読む―

坂東　智子
（山口大学）

はじめに

小中高いずれの校種の国語科教員になるにしても、『源氏物語』は避けては通れない作品である。和歌や歌物語、伝奇物語から『源氏物語』への流れがある。『源氏物語』からその後の和歌や文学作品へという日本文学、日本文化の本流がある。この流れを具体的に実感をもって捉えることは、国語科の教員となるためには極めて重要である。しかし、一方では、国語科教員免許を取得しようとする学生であっても、関連する物語の原文を読むことは勿論、注釈書や研究書、先行論文等を単独で読むことはなかなか荷が重いことだという現状があることも確かである。

筆者はこれまでにも、原文だけでなく現代語訳を加えた複数の文字テクスト、源氏絵や映像等の絵画的テクストを併用して、①先行する物語の記憶、②物語内部の記憶、③受容者の記憶の３方向からのアプローチで、『源氏物語』を構造的に読み解く方法を提案してきた。

これらを踏まえ、本稿では、国語科教員養成課程に学ぶ学部生が、長大な『源氏物語』の構造を俯瞰し、物語の重層的な時間進行や複雑な内面を捉える視点を獲得する一つの方法として、「国宝・源氏物語絵巻柏木二」とその復元模写、高等学校国語科教科書『古典Ａ』（２東書 古典Ａ301）に掲載された「女三の宮と唐猫」『源氏物語絵色紙帖』（土佐光吉筆）の３枚の源氏絵（絵画的テクスト）を読むことで、『源氏物語』第二部の中心の物語である「柏木物語」の全体像を捉える方法を提案する。

１．なぜ、「柏木物語」か

増田繁夫（2010）は、「源氏物語は、当時の文学作品として多くの面で画期的な性格をもっているが、その一つは、最初に取り上げた物語の主題を書き進めていく過程で、新しく考えたり見えてきたさまざまな問題を、そのあとの物語において改めて人物や事件を異なった設定にしてとりあげ、より深く追求しているところである。」[1]という。第一部の光源氏と藤壺の密通の問題は、第二部では、源氏の若い妻三宮と柏木の密通とそれを源氏が知って悩むという設定になって繰り返しとりあげられる。「第二部の柏木と女三宮の密通事件においては、柏木は自分の通じた女三宮の夫源氏に対してさまざまに深刻に思い悩むことになる。その柏木の源氏に対する屈折した心理や、妻の密通を知ったときの源氏の態度、妻の産んだ子を黙って自分の子として育てる源氏の複雑な苦渋を描くことが、第二部の中心の物語になっている。」[2]（増田 2010）

今西祐一郎（2000）の言を借りれば、『伊勢物語』という恋物語の短章から、長編物語である『源氏物語』への「質の変化」があり、それは密通の子の誕生による「時間」の出現と、密通をめぐる当事者の意識である「内面」の出現というかたちをとっている。[3]「柏木物語」は、源氏物語における「時間」と「内面」の出現の両面に関わる物語である。それまでの物語と『源氏物語』の質的な違いを捉えるためには欠くことができない物語が、「柏木物語」である。

２．高等学校教科書所収の「柏木物語」

山口県立西京高等学校が平成26 年度に採択した教科書『古典Ａ』（21 東京書籍、古典Ａ301）[4]には、『源氏物語』に関して後掲資料１の教材が採録されている。高等学校では、原文は、『源氏物語』の第一部、第二部、第三部から網羅的に採録されている。「文学史における『源氏物語』」や「サイデンステッカーと『源氏物語』の自然観」といった文章も併せて採録し、日本文学史上における『源氏物語』の位置や『源氏物語』と英語圏の自然観の違い、文化の違いにも目を向けさせようとする教材配列がなされている。しかし、当然のことではあるが、国語科の教員となるためには、十分なものとは言えない。そこで、既習事項に重ねながら、第一部と第二部、第三部の関係や物語の重層的な時

間進行を理解するための授業を構想することとした。

資料１　『古典Ａ』（21 東京書籍、古典Ａ301）所収の『源氏物語』関連教材

◎文学史における『源氏物語』
　なにがしの院【夕顔】
　野宮の別れ【賢木】
　新春の六条院【初音】
◎コラム①六条院
　蛍火【蛍】
◎唐猫の綱【若菜上】
◎薫の御五十日【柏木】
　言語活動①干支と行事・風俗
　宇治の姫君たち【橋姫】
　橘の小島【浮舟】
　むなしき御文【夢浮橋】
◎サイデンステッカーと『源氏物語』の自然観　　ハルオ・シラネ

３．学部２年対象の「柏木物語」の授業の流れ

国語科教員免許を取得しようとする学生２年生対象の「柏木物語」の授業のおおまかな流れは以下のものである。

授業の流れ

①『源氏物語』についての既習事項を確認する。
②「古典 A」から◎を配布する。
③「柏木物語」の全体像をイメージする。
④『源氏物語』における「柏木物語」の意味を考える。
⑤「古典 A」の「唐猫の綱」（若菜上）の原文と挿絵を対照させて読む。
⑥教科書にはない「蹴鞠の場面」の原文を提示する。
⑦「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を提示する。
⑧どのような場面か、柏木と夕霧は何を語り合っているのかを予想させる。
⑨絵巻に該当する「柏木」巻の原文を配布する。
⑩柏木と夕霧の会話を理解する。
⑪「国宝・源氏物語絵巻柏木二」の復元模写を提示する。
⑫国宝絵巻柏木二と復元模写を比較して気づいたことを書かせる。
⑬復元模写で明らかになった、夕霧の桜襲の直衣や壁代の桜を絵師がなぜ描いたのかを考えさせる。
⑭「唐猫の綱」の挿絵と関連させて「絵巻柏木二」を読み解く。
⑮柏木と女三の宮の密通をめぐる、登場人物の複雑な内面描写が、それまでの物語とは違う「質」のものであることを紹介し、第一部、第二部、第三部の関係を把握させる。

４．教科書所収の「柏木物語」

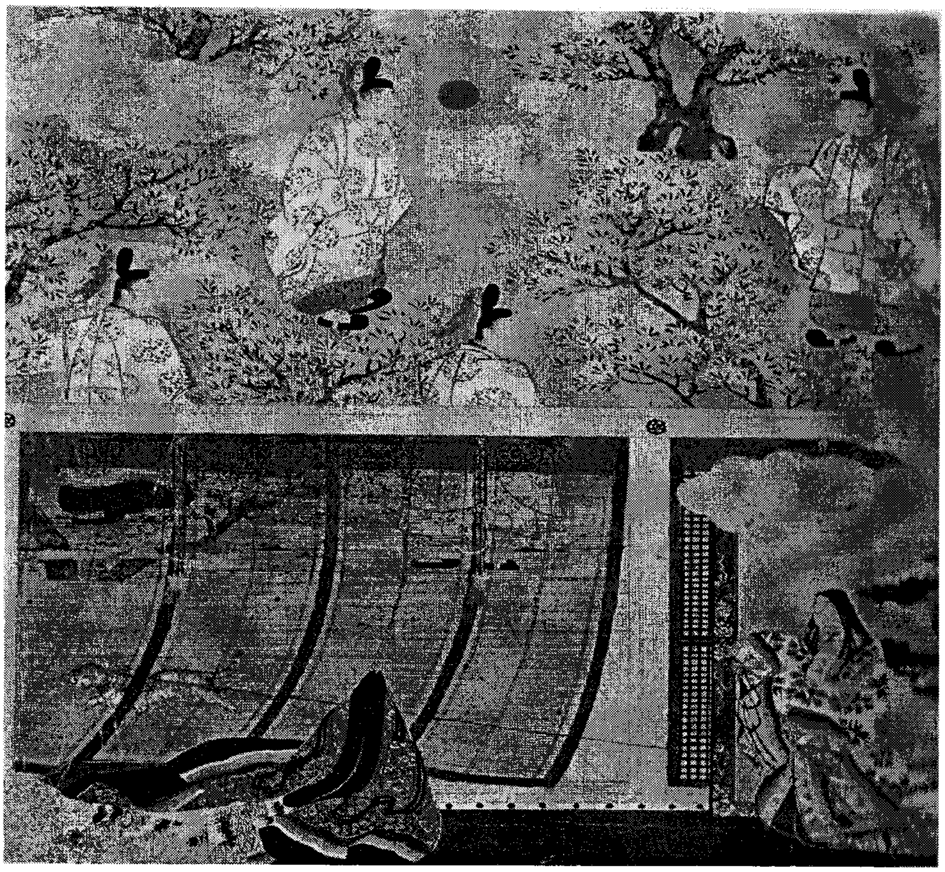
「古典 A」所収の「唐猫の綱」の原文、挿絵を提示する。高等学校で既習であるか否かにかかわらず、教科書所収ということで受講者の必要感を喚起し取っつきにくさや抵抗感を軽減するためである。
リード文と原文の一部、挿絵を教科書から引用する。

資料２　『古典Ａ』教科書（2 東書古典 A301）所収の「唐猫の綱」リード文[5]

朱雀院は出家にあたって、娘女三の宮の後見を光源氏に頼む。（中略）藤壺の宮の姪ということで期待していた光源氏は、幼稚な宮に落胆し、扱いは自然と粗略になっていった。以前より女三の宮に執心していた柏木の衛門の督（太上大臣の長男）は、そうした噂を耳にするにつれ、宮に同情し、いよいよ諦めきれずにいた。／うららかな春の日、六条院を訪れた柏木は、友人の夕霧らとともに、春の町で蹴鞠に興ずる。休息のため寝殿の中央にある階段に腰を掛けた二人は、外をのぞき見ている女三の宮方の様子をそれとなく観察する。

資料３　『古典Ａ』（2 東書古典 A301）所収の「唐猫の綱」原文の一部[6]

几帳の際少し入りたるほどに、袿姿にて立ち給へる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、まぎれどころもなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七、八寸ばかりぞあまり給へる。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかり給へるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。夕影なれば、さやかならず奥深き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠に身を投ぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬ気色どもを見るとて、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたく鳴けば、見返り給へる面持ち、もてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの人やと、ふと見えたり。



資料４　「女三の宮と唐猫」『源氏物語絵色紙帖』（土佐光吉筆）[7]

教科書（２東書 古典Ａ301）には所収されていないが、次の原文も併せて提示し読ませたい。桜の花が雪のように散りかかる夕映えに蹴鞠に興じる夕霧と柏木の姿が描かれた部分である。柏木が最も美しく精彩をはなつ瞬間ではなかろうか。

資料５　「若菜上」巻　六条院の蹴鞠の遊びの原文の一部[8)]

大将も督の君も、みな下りたまひて、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ夕映えいときよげなり。（中略）ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌木の蔭に、かくはかなきことなれど、よきあしきけぢめあるをいどみつつ、我も劣らじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり。容貌いときよげになまめきたるさましたる人の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ。御階の間に当たれる桜の蔭によりて、人々、花の上も忘れて心に入れたるを、大殿も宮も隅の高欄に出でて御覧ず。（中略）。大将の君も、御位のほど思ふこそ例ならぬ乱れがはしさかなとおぼゆれ、見る目は人よりけに若くをかしげにて、桜の直衣のやや萎えたるに、指貫の裾つ方すこしふくみて、けしきばかり引き上げたまへり。軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中の階のほどにゐたまひぬ。督の君つづきて、（柏木）「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、宮の御前の方を後目に見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつまづま透影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ。

５．「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を読む

『国宝源氏物語絵巻』（徳川・五島本絵巻）は、1109～1150年頃に成立したと考えられている。現存するのは十九図といわれており、いずれも剥落が著しい。2006年には、「科学的な調査によって絵が分析され、また、現在の日本画家の技によって、十九図全てが復元模写された。」まず、国宝絵巻（割愛）を提示し、ワークシートに場面や気づきを記入してもらう。

柏木衛門督（太政大臣の長男）は、光源氏の若い妻である女三の宮と密通し、罪悪感にかられて重病に陥っている。そこへ柏木の親友である光源氏の長男夕霧が見舞う場面である。画面の中央に横たわっているのが柏木である。夕霧はその枕元に座っている。佐野みどり（2000）は、「柏木は、女三宮の出家を聞いて、いっそう病重く、回復の見込みもない。帝も心を痛め、にわかに権大納言に昇進させた。夕霧は、友を見舞い力づけようとするが、柏木はもはやこれまでと、源氏の勘気のとりなしを頼み、正妻落葉宮の後事を託すのであった。／床に臥せる柏木を包み込むかのように描かれた夕霧の姿態は、友への優しき思いを象徴する。悲しみにくれる女房たちの装束や室内調度の文様と彩りが、柏木の悲劇性を強調する画面は、華麗でありながらも、憂愁に満ちている。」[9)]と解説する。

原文には次のようにある。

資料６　「国宝・源氏物語絵巻 柏木二」に該当する「柏木」巻の原文[10)]

大将の君、常にいと深う思ひ嘆きとぶらひきこえたまふ。（中略）（柏木）「なほこなたに入らせたまへ。いとらうがはしきさまにはべる罪は、おのづから思しゆるされなむ」とて、臥したまへる枕上の方に、僧などしばし出だしたまひて、入れたてまつりたまふ。（中略） （夕霧）「などかく頼もしげなくはなりたまひにける。今日は、かかる御よろこびに、いささかすくよかにもや、とこそ思ひはべりつれ」とて、几帳のつまを引き上げたまへれば、（柏木）「いと口惜しう、その人にもあらずなりにてはべりや」とて、烏帽子ばかり押し入れて、すこし起き上がらむとしたまへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり。御座のあたりもの清げに、けはひ香ばしう、心にくくぞ住みなしたまへる、うちとけながら用意ありと見ゆ。重くわづらひたる人は、おのづから髪、髭も乱れ、ものむつかしきけはひも添ふわざなるを、痩せさらぼひたるしも、いよいよ白うあてはかなるさまして、枕をそばだてて、ものなど聞こえたまふけはひいと弱げに、息も絶えつつあはれげなり。

資料７　「柏木」巻の原文　―夕霧と柏木の会話から―[11)]

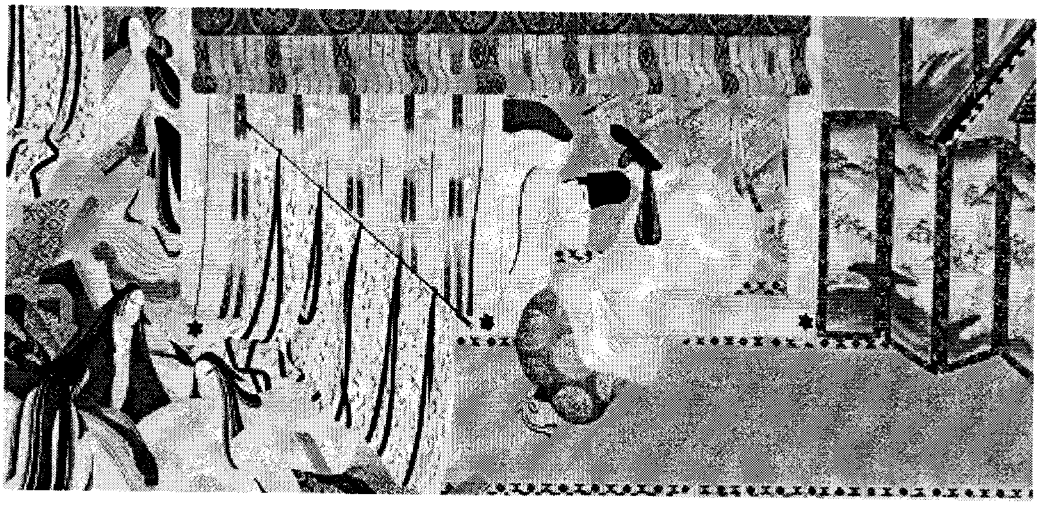
（柏木）「（中略）また心の中に思ひたまへ乱るることのはべるを、かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。これかれあまたものすれど、さまざまなることにて、さらに、かすめはべらむもあいなしかし。六条院にいささかなる事の違ひ目ありて、月ごろ、心の中に、かしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、

世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の楽所の試みの日参りて、御気色を賜りしに、なほゆるされぬ御心ばへあるさまに御眼尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思ひたまへしに心の騒ぎそめて、かく静まらずなりぬるになむ。人数には思し入れざりけめど、いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世の愁へにて残りはべるべければ、論なう、かの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを、事のついではべらば、御耳とどめて、よろしう明らめ申させたまへ。亡からむ後にも、この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはべるべき」などのたまふままに、いと苦しげにのみ見えまされば、いみじうて、心の中に思ひあはすることどもあれど、さしてたしかにはえしも推しはからず。

臨終の際になって、柏木には言わずには死ねない事があったのである。打ち明ける相手は、親友である夕霧でなければ打ち明けることができないことだと断った上で、女三の宮との密通と、それが源氏の知るところとなったことをほのめかす言葉が続いている。原文「違ひ目」は女三の宮との密通事件を漠然といったものである。この長い柏木の言葉は、密通そのものの罪の意識にかられてというよりは、源氏との関係において、絶対に源氏には憎まれては生きてはいけないという恐れ、源氏に対する思惑が強く心を支配していることを示している。

「柏木物語」の中心は、女三の宮と柏木との密通そのものではなく、密通事件により生じる当事者、女三の宮、柏木、光源氏の三者の苦悩や複雑な心理にあるといってよい。高等学校で、「柏木物語」の一端を学習したものは少なくないであろうが、上のような当事者の内面を丁寧に読む経験をしたものは少ないと考えられる。「柏木物語」を読む際に、絵巻などの絵画的テクストを用いるのは、それまでの物語にはない、『源氏物語』の内面描写を丁寧に読んでほしいためである。

6．「国宝・源氏物語絵巻柏木二」の復元模写を読む



資料８　「国宝・源氏物語絵巻 柏木二」復元模写　加藤純子制作[12)]

「柏木二」の復元模写の完成により、柏木を見舞う夕霧の桜襲の直衣が、女三の宮を柏木と共に垣間見した、蹴鞠の場面で夕霧が着用していたのと同じ桜の直衣姿であることが明らかになった。復元模写プロジェクトの詳細を記録した『よみがえる源氏物語絵巻』「柏木二」の解説には次のような記述がある。「夕霧の装束や几帳は、鉛を成分とした白（鉛白）と銀とで描かれている。この色面は、現状では紫色を呈しており、従来、鉛白と銀との併用による化学変化で変色したと考えられてきた。しかし今回の復元模写を進めていく過程で、蘇芳と推定できる有機色料（染料）の存在が確認された。この紫色は、蘇芳の変色とみなし、さらに表現としては、「桜襲」と呼ばれる裏地に紫や赤、表が白の春の装束に用いられた色目で、裏の色が表に匂った表現と判断された。」[13)]

『源氏物語』「柏木」巻本文にはない、桜の文様の壁代や夕霧の桜襲が描かれたのは、桜の盛りの六条院の蹴鞠の場面を暗示するためではなかったかというのである。末期の柏木の脳裏には、あの女三

の宮の桜の織物の細長姿をはじめて垣間見た若き日が走馬燈のように甦っていたと絵巻作者は時間を重ねたのではないか。国宝絵巻と資料8（復元模写）を比べて、桜の文様に気づいた受講者は、先の「六条院の蹴鞠の場面」と重ね合わせ、「柏木物語」の全体像やそこに流れる時間を捉えることが容易になると考えられる。

7．おわりに　―3枚の源氏絵を用いることの効果について―

徳川・五島本「源氏物語絵巻」の各段の絵について、佐野みどり（2000）は、美術史研究の立場から次のように述べている。

> 画面を見つめ物語に対応させて読み解いていくうちに、情景を設定する景物がその＜現在時制＞を飛び越えて、前後の時間を呼び込んでいることに気づく。「源氏物語絵巻」の画面は、ストーリーを場面場面に切り取るだけではなく、前後の時間を象徴するモチーフをも取り込み、見る者の思いを物語りの時間の流れへと誘うのである。[14)]

同様のことを、河添房江（2006）は、国文学研究の立場から次のように述べている。

> 「源氏物語絵巻」の各段の絵は、かなり長いスパンで考えるべき、懐かしい物語の時間を取りこんでいるのではないか。あるいは鑑賞者が思い出の場面の時間をその景物に投入して享受しうるような、そんな仕組みをもっていることに注意したいのである。今回、復元模写の完成により、絵の細部が判明したことで、離れた時間の蓄積がさらに鮮明になったと思われる。（中略）しばしば言われるように、徳川・五島本「源氏物語絵巻」は、『源氏物語』を知らない者が作品の筋を知るために享受するものではなく、『源氏物語』を知りに知りつくした者が楽しめる絵巻である。絵巻の絵も『源氏物語』に通暁した制作者の記憶がさまざまに取りこまれ、またさらに鑑賞者の連想の回路に放たれることで、さまざまな意味を生成しうることができる。[15)]

「国宝・源氏物語絵巻柏木二」とその復元模写、高等学校国語科教科書『古典Ａ』（２東書 古典Ａ301）に掲載された「女三の宮と唐猫」『源氏物語絵色紙帖』（土佐光吉筆）の３枚の源氏絵（絵画的テクスト）を読むことで、『源氏物語』第二部の中心の物語である「柏木物語」の全体像を捉えることが容易になると考えられる。視覚的に「柏木物語」の全体像を捉えることで、長大な『源氏物語』の構造を俯瞰し、物語の重層的な時間進行を捉える視点が獲得される。さらに、次の段階として、今度は複雑な内面を丁寧に読み取っていく大きな手掛かりになるのである。

＜注＞

1）増田繁夫（2010）『源氏物語の人々の思想・倫理』和泉書院、p. 96。
2）1）に同じ。
3）今西祐一郎（1998）『源氏物語覚書』岩波書店、p. 3。
4）三角洋一他（2013）高等学校国語教科書『古典A』（2 東書 古 A301）東京書籍。
5）4）に同じ、p. 52。　6）4）に同じ、p. 54。
7）4）に同じ、p. 53。
8）阿部秋生他（1998）『古典セレクション　源氏物語⑨＜全 16 冊＞』小学館、pp. 196-198。
9）佐野みどり（2000）『じっくり見たい『源氏物語絵巻』』小学館、p. 24。
10）阿部秋生他（1998）『古典セレクション　源氏物語⑩＜全 16 冊＞』小学館、pp. 254-257。
11）10)に同じ、pp. 258-260。
12）「国宝・源氏物語絵巻 柏木二」復元模写（加藤純子制作）、所収：NHK 名古屋（2006）『よみがえる源氏物語絵巻 全巻復元に挑む』日本放送出版協会、p. 89。
13）徳川美術館『よみがえる源氏物語絵巻』徳川美術館、2005、p. 62。
14）9）に同じ、p. 91。
15）河添房江（2006）「復元模写から読み解く「源氏物語絵巻」と『源氏物語』―「夕霧」「御法」「東屋（二）」を中心に―」『國語と國文学』（東京大学国語国文学会）至文堂、pp. 2-12。